令和六年度卒業証書授与式式辞

眼下に広がる芦崎湾を照らす日の光に、春の兆しを感じるようになりました。

御来賓の皆様方、並びに卒業生保護者・御家族の皆様方の御出席を賜り、令和六年度第七十七回卒業証書授与式を挙行できますことは、大いなる喜びであり、感謝に堪えないところです。心から御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書をお渡しした一四三名の皆さん、改めて申し上げます。卒業おめでとう。

そして、保護者・御家族の皆様、心からお祝い申し上げます。本校の教育方針を御理解いただき、今日まで一緒に歩んでいただきましたことに、教職員一同、厚く御礼申し上げます。

さて、これから卒業生の皆さんたちが踏み出す社会は、急激に進む少子・高齢化や、インターネットの更なる普及と技術向上、人工知能（ＡＩ）技術の驚異的な進展により、これまでの経験則では太刀打ちできない予測不可能なものになってくると言われています。

また、近年の世界情勢にも不穏なものがあります。東西対立の冷戦構造が崩れてから既に三十数年が経過しましたが、未だこれに代わる新たな国際秩序は現れず、宗教、民族間の対立が各地で先鋭化し、憎しみの連鎖を引き起こしています。その中で、価値観多様化の波は、互いを認め合う理性に裏打ちされた形で広がりを見せていたのに、今や自分だけ良ければよいという本能の大波によって打ち消されつつあるように見えます。グローバル化が進んだ現代では、他国で生じた混乱も対岸の火事としてはいられません。嫌でもそこに巻き込まれてしまうのです。インターネット上では、真実とフェイク情報が入り交じって拡散され、何を信じたらいいのか分からなくなっている状況があります。我々は、そういう時代の流れの中に身を置いているのです。

このような先行き不透明な社会と時代に、一体どう立ち向かっていけばよいのでしょうか。その答えの一つは、あなた方が受け取った本校の卒業証書にあります。

日本の教育は、これからの社会と時代に対応する力を子どもたちにつけるため、百年に一度の大改革をスタートさせました。従来の「知識・技能」に加えて、「思考力・判断力・表現力等」そして「主体的に学習に取り組む態度」を、「主体的で対話的な深い学び」によって養おうとしています。さらに、ＩＣＴ時代に対応する学習形態への転換を大きく進めています。この新しい学びの実現のため、本校を含め全国の学校では今、試行錯誤が重ねられています。

その中において本校は、今年度「キャリア教育優良校文部科学大臣表彰」を受けました。キャリア教育とは、「自立した社会人となるための教育」です。全国には約四八〇〇の高校がある中、本校を含むわずか三十五校だけがこの表彰を受けました。本校における新しい学びのプログラムが、日本有数の優れたものであると認定されたのです。大変な快挙でした。

学校外の方々と積極的に連携した各系列の学習、「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」、また「外まなび部」のスキルアップ活動、「下北ＢＯＵＳＡＩネットワーク」の活動など、文科省が太鼓判を押した本校の教育プログラム、それを修了したという証書を、皆さんは本日手にしたのです。先行き不透明な社会と時代に対応するベースとなる探究する力は、既にあなたたちの中に培われています。自信を持って社会に飛び出してくだ

さい。

最後に一つ、皆さんに贈りたい言葉があります。それは、哲学者ニーチェの言葉「足下(そっか)の泉を掘れ」という言葉です。「足下」とは「あしもと」という意味です。「あしもとを掘れ、そこに泉が湧く」、すなわち「自分の置かれた状況や場所で、粘り強く努力しなさい。実はそこに隠れたチャンスがあるのだから」というのです。

時代や社会が変化していく中、我々は、次々現れるその時々の事象やものに目を奪われがちですが、実は、自分の足元に、泉のごとき新鮮なチャンスが眠っている場合があるのです。

そのことは、実際に「足下の泉」を掘り当て、地域を支え活躍する、さらに県、東北、日本、世界へと活躍の場を広げて躍動する多くの「下北 HEROES（ヒーローズ)」の姿を、本校の学びを通して数多く見てきたあなたたちが、一番分かるのではないでしょうか。

さあ、次は皆さんが「下北 HEROES」となる番です。皆さんの大いなる旅立ちを寿（ことほ）ぎ、式辞といたします。

令和七年三月一日

青森県立大湊高等学校校長　伊藤　文一